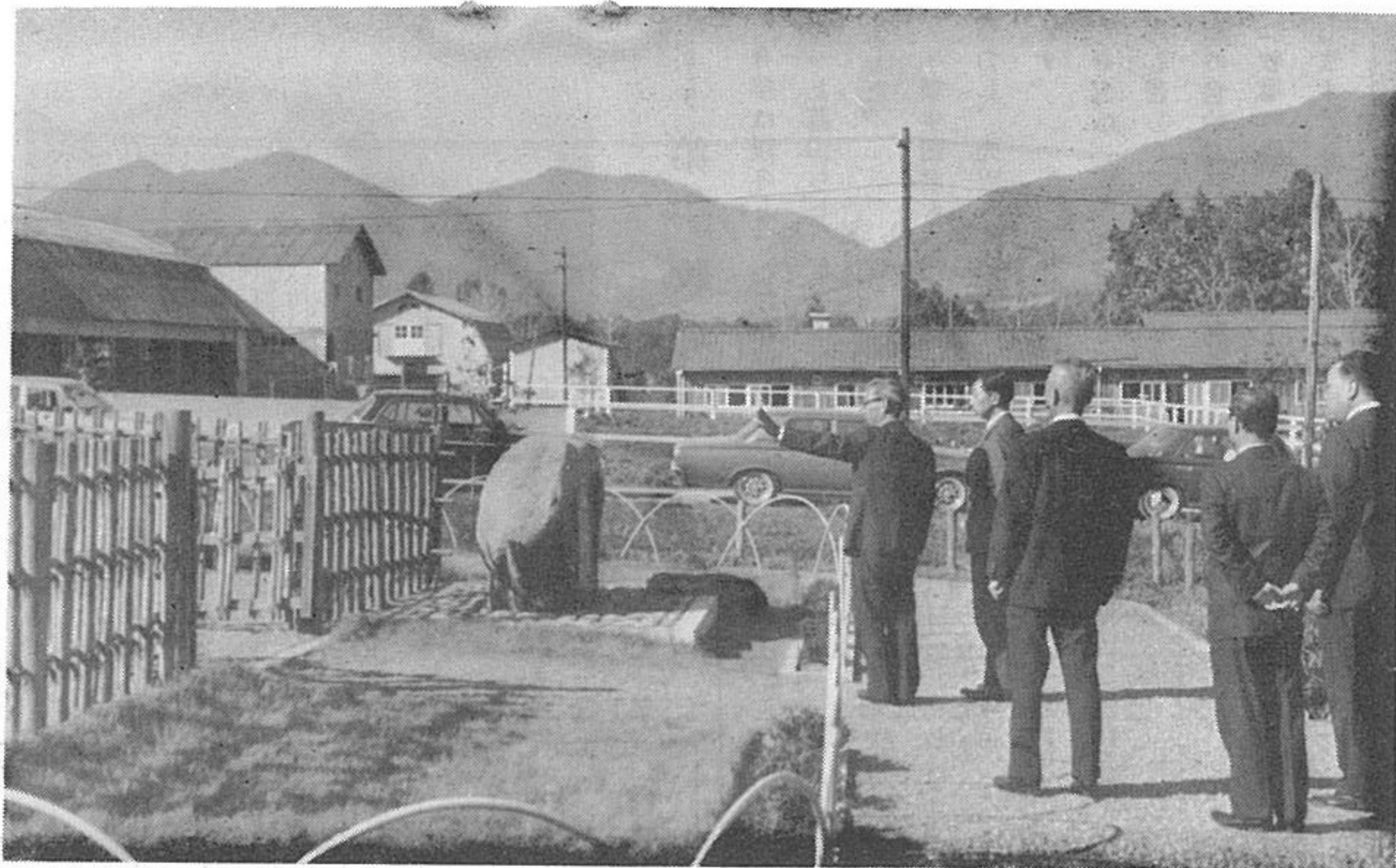


# 学 園 だ よ り

№. 4

1972

3月31日発行  
財 団 法 人  
中国四国酪農大 学 校



天皇・皇后両陛下お手播き前の高松宮

我が国における最近一〇年間の酪農の発展は実に目覚ましいものがあり、その上昇ムードの中にあつて、昭和四五年の乳価据置きに対して二度にわたる購入飼料価格の値上げは、酪農家の生産意欲を減退させ、また肉資源の不足は肉価の上昇を招き、ひいては乳用牛の廃用を促すなどにより昭和四六年においては殆んど飼養頭数の伸びは見られなかった。また牛乳消費の面においては、抗生物質、農薬等による牛乳汚染問題で飲用乳に対す

る不信感が尾をひき、その上昭和四六年の夏期低温も禍いして伸び悩む結果となつた。



その後これらの問題については、乳価にあっては昭和四六年に若干の改訂が行われ、また牛乳汚染に對しては関係者の積極的な努力によつて一応の解決を見たので、悪条件の一部は解決され今後の発展が期待出来るところである。然しなお根本的な問題として、我国酪農は飼料生産基盤の狭小による粗飼料不足、排泄物処理の困難性等

多頭化を容易に推進出来ない大きな悩みを持っている。従つてこの壁を破らない限り我国酪農の眞の発展は望めない。即ち米作転換に伴う水田の活用、未利用森林原野の開発利用、更にこれを能率的に推進する団地化、組織化が今後の重要課題ではないであろうか。

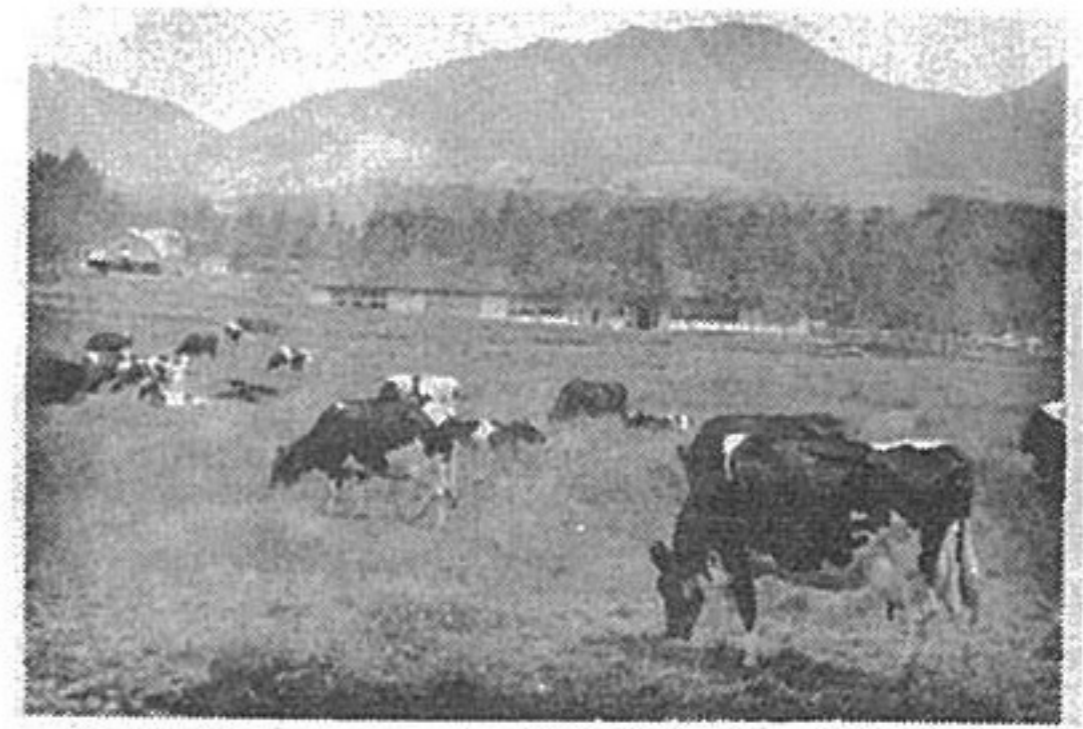
取入れて行かう工夫や努力が必要であらう。このことはまた乳価との関連が深いところで、生産者の立場からすれば乳価は出来るだけ高いことが望ましいが、消費能力を併せ考へる時、乳価の値上りのみに依存することなく経営の合理化を図らなければ、我国酪農の発展は望み得ない。特に貿易自由化の動き、円切り上げ、英国のEC加盟等により、我国が国際的消費市場として注目を集めている今日、我々は良質牛乳の生産に努めると共に、出来るだけその生産コストを下げ消費者たる一般国民の理解と協力を得なければ、この現状を乗りきることが出来ないであろう。

諸君の御健闘を祈つてやまない。

## 我国酪農の活路

目次

我国酪農の活路	花田時太	1
牧場の近況		
第一牧場	森 大二	2
第二牧場	広友元一	3
私の酪農経営改善計画	岡田研吾	4
非脱気処理によるビニール・スタックサイレージの調整	金田清	5
海外だより		6
大学校日記		7
旧職員名簿		8
現職員名簿		8
卒業生および在校生名簿		9
お知らせ		12



§§§ 第一牧場 §§§

今年はや暖冬といわれながらも、  
やっと蒜山らしい景色になってき  
ました。

卒業生諸君も目標に向かって一層  
努力し、充実されている事と思い  
ます。

今回は、前年に続いて、在学中、  
最も苦しく、又、楽しかった想い  
出の自給飼料の生産、利用を重点  
に牧場の現況を報告方々連絡いた  
します。

の 近 況

§ 概況

第一牧場が、  
管理する自給  
飼料圃は、第  
一表のとおり

であります。特に飼料作物については、蒜山という気象状況を勘案して、輪作体系を確立し、より多収とより有効利用を検討しております。

第1表 作付別圃場面積 (10a)

区分 年次	牧草地				飼料作物			合計	備考
	放牧地	乾草放牧	乾草	小計	刈取放牧	放牧刈取	小計		
46	6.49	2.72	10.00	19.21	3.07	1.10	4.17	23.38	借用地を含む

第2表 46年次における作付体系

利用区分		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
牧草地	放牧				4.16					(13回放牧)			12.5
	乾草放牧								(1番刈乾草以降)				
飼料作物	刈取放牧		(イタリアン放牧)				(サイレージ用トウモロコシ)				(イタリアン放牧)		
	放牧刈取		(イタリアン8回放牧)							(カブ)			

第4表 利用体系別施肥量 (10a 当り kg)

年次 成分区分	刈取放牧	放牧刈取	乾草放牧	放牧	平均
46	46	46	46	46	46
N	27.8	34.6	20.6	21.6	21.4
P	23.6	28.9	18.6	17.2	20.0
K	20.7	16.3	17.2	17.4	18.1

注 刈取放牧及び放牧刈取圃場の堆肥は含まず。

第3表 自給飼料の生産収量の現況 (坪刈収量 kg)

区分	放牧	乾草放牧	乾草	刈取放牧	放牧刈取	合計	備考
年次	利用	利用	利用	利用	利用		
10a 当り	46	3566 (5,845)	3414 (4,957)	1297 (2,900)	3,964 (5,850)	7,397 (10,801)	平均 2,803
NIK 当り	46	270.4	236.9	437.4	209.6	312.1	平均 285.7

§ 自給飼料の生産状況  
自給飼料の生産状況は次表のとおりであります。

第5表 放牧利用の状況

利用区分	年次	10a 当り生産量 (kg)	放牧延頭数 (頭)	1日1頭採食量 (kg)	10a 当り放牧頭数 (頭)	放牧対象作物
刈取放牧	46	1,072	754	43.6	24.6	イタリアンライグラス (5月上旬まで)
放牧刈取	46	3,014	655	50.6	59.5	イタリアンライグラス (7月末まで)
乾草放牧	46	1,957	1,052	48.7	40.2	混播1番刈り乾草以降放牧
放牧	46	2,936	3,858	48.6	60.4	全期放牧利用
平均	46	2,314	-	48.3	47.9	

§ 自給飼料の利用状況  
自給飼料の利用については、夏期極力節約し、冬期飼料の確保に努めております。  
放牧区については、草丈二〇センチ前後を対象に利用性の高い午前十時方放牧を實行し、掃除刈りは、乾燥もしくはサイレージ材料

第6表 作物別利用状況

作物名	利用方法	利用率 46年
イタリアンライグラス	放牧一部乾	53.0%
トウモロコシ	サイレージ	77.0
飼料用カブ	生給与	86.0
混播牧草	乾草放牧一部サイレージ	65.0
平均		65.0

として完全利用し、飼料作物圃のイタリアンライグラスの内、次作にカブを作付けする圃場については、カブの適期播種並びに蒜山の夏期気温を活用したイタリアンの越夏利用を行っております。  
放牧における利用状況は次表のとおりであります。

考 察

飼料給与の状況は、次図のとおりであります。乾草は年間不断給与するとともに、粗飼料の平均化に努めております。

乳牛に安定した基礎飼料を給与するためには貯蔵飼料を如何に確保するかが、大きな問題であります。四十六年春夏の如く気温が平年より低い場合は牧草、飼料作物共成長が悪く、蒜山の如く貯蔵飼料に依存する期間のながい地にあつては大きな問題であります。

# 牧 場

## § 第二 牧場

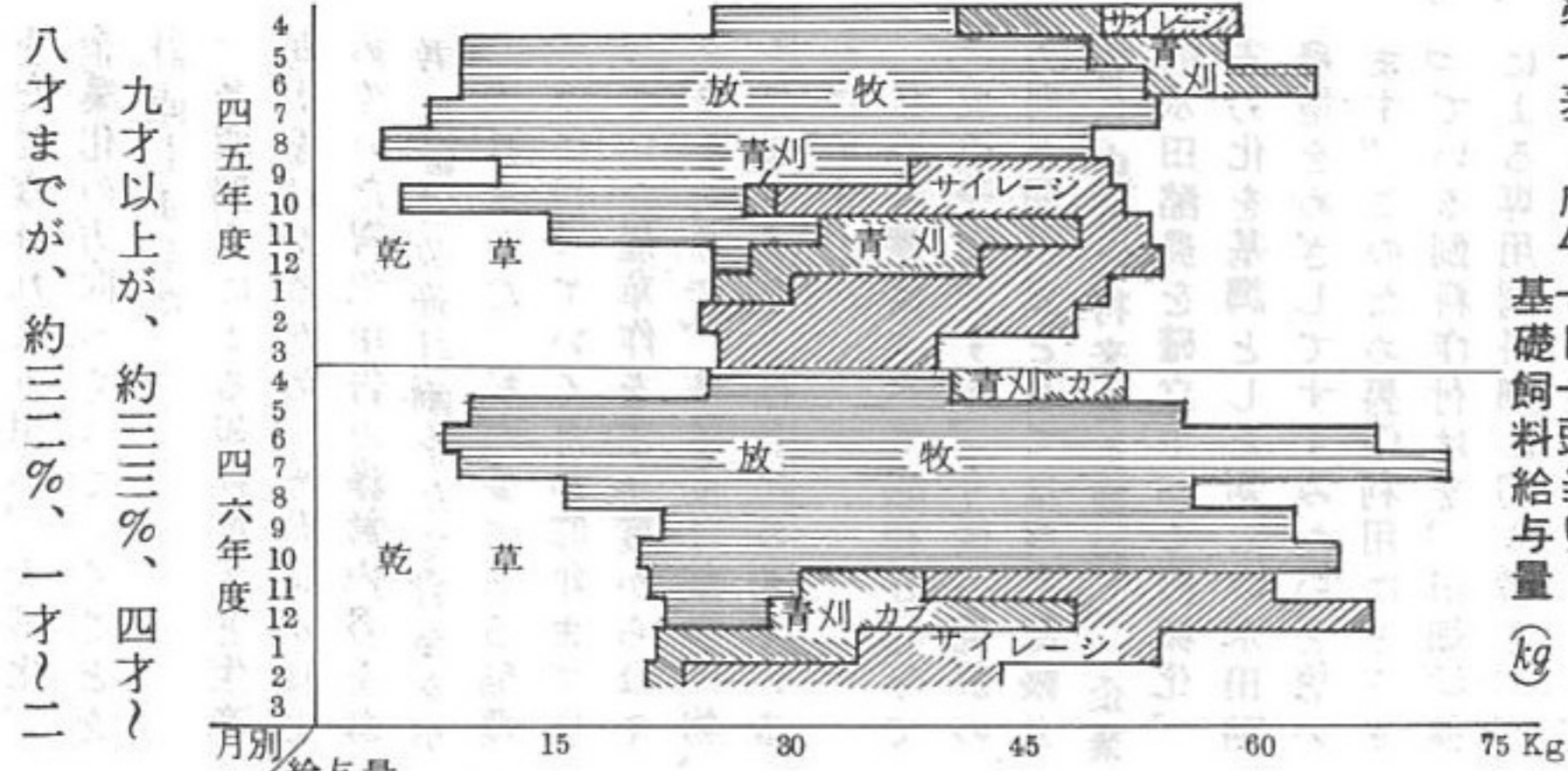
このようなレジャーブームのなかで、牧場では、学生、職員と一緒に汗を流して酪農経営者の、養成を目指して頑張っております。

### § 第二牧場ジャージー種 飼養規模

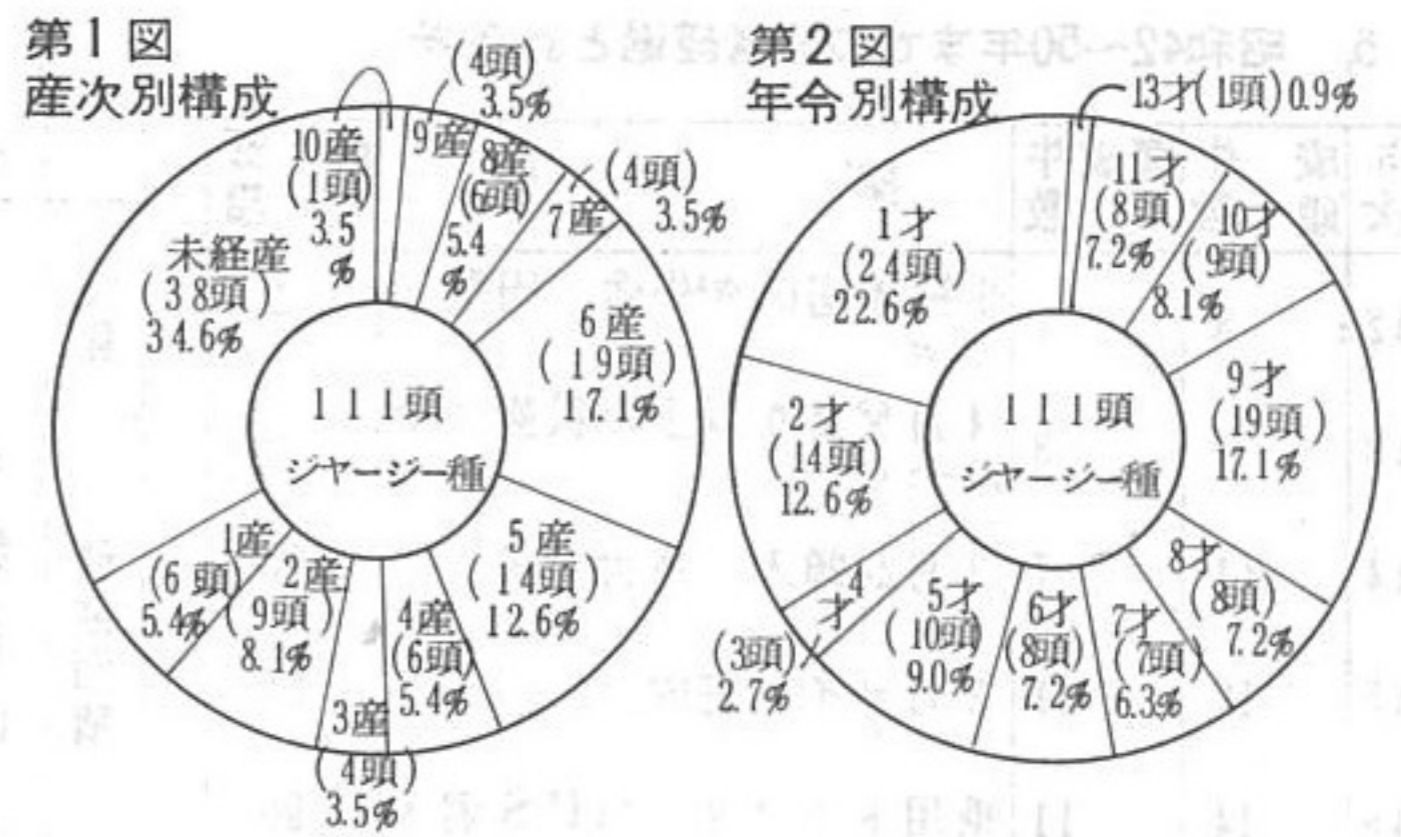
飼養頭数は、(二月一日現在) 成牛七三頭、育成牛三八頭、計一一頭であります。

これを年令別、産次別にみますと、次の構成です。

第七表 成牛一日一頭当り 基礎飼料給与量 (kg)



九才以上が、約三三%、四才以下が、約三二%、一才一才二



第七表 蒜山の気象状況 (平均気温)

区分	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年平均	備考
平年	最高	3.9	4.8	9.3	16.5	21.2	24.1	28.4	29.4	24.5	18.6	13.1	7.4	16.8	(1) 平年 S13年~38年の平均 (2) 根雪 15~210
	最低	-5.6	-4.7	-1.4	3.0	8.0	13.6	19.0	18.9	14.7	7.7	2.1	-1.5	6.3	
46年	最高	4.2	3.3	9.2	16.9	20.9	23.3	29.0	27.0	22.1	19.1	14.6	6.4	16.3	(3) 初霜 10.31 晩霜 5.6 初雪 11.16
	最低	-4.8	-8.5	-1.0	1.5	5.3	14.3	19.4	17.1	13.0	6.7	1.1	-1.7	5.2	

向上を当面の課題として次の二点を目標としております。

(1) 各利用方式共、生産性を三〇%程度向上する。

(2) 利用率を平均七〇パーセント程度に向上する。

終りに  
乳牛を飼養する場合良質の粗飼料(即ち基礎飼料)を平均化し充分に給与することが、乳牛の耐用年数の長期化、繁殖および泌乳能力の向上につながる重要なカギでありますので一層努力し乳牛の要求を充たし安定した経営を樹立して下さい。

(第一牧場長 森大二)

第一牧場においては当面、貯蔵飼料の安全確保、ならびに利用性の才が約三五%で、扶養家族である育成牛が、かなり多いのですが、増飼計画もあり止むをえません。産次別では、六産一〇産が、三〇・四%、一産一五産三五%、未經産、三四・六%、とかなり産次の多い牛がいて、産乳量はなかなか計画どおりにありませんが、四七年度は計画達成に努力したいと思っています。

### § ジャージー種肥育試験

ジャージー種牛の肉の利用価値

が、極めて低い現状にあります。俗に、乳でもうけて、肉で損をすると言われていますが、これは、特にカロチンによる黄色脂肪が、きらわれ非常に安い価格で、処分されています。この点を何とか解明するため飼育試験を実施しております。

施設に余裕もなく多数の頭数が出来ないの、試験牛は五頭、何れも繁殖障害或は老令のため廃用予定牛であります。

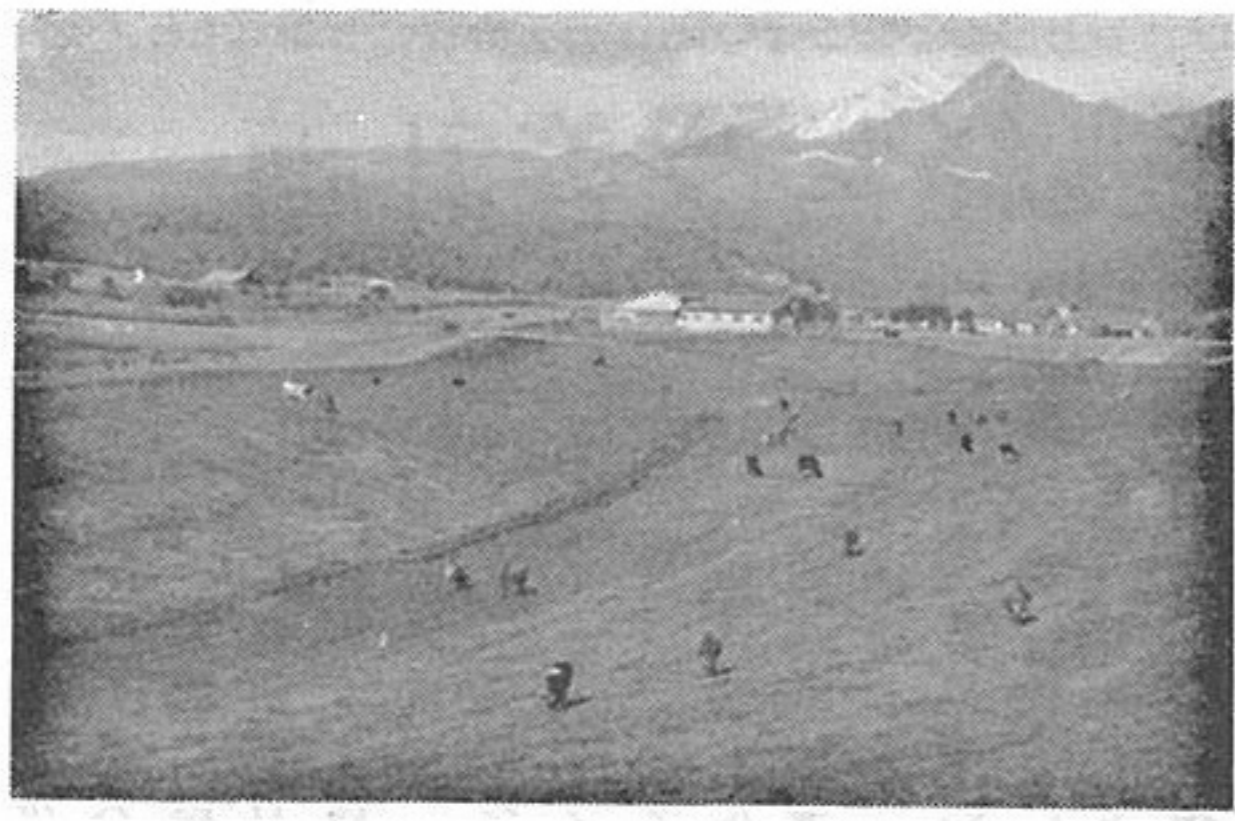
試験は、一区、二区、に分け、

一区は二頭、スタンションで、制限給飼、二区は三頭、追込牛舎で、不断給飼としました。期間は、準備期一〇日、前期三〇日、中期三〇日、後期三〇日、計一〇〇日です。

飼料は、肥育用配合飼料、麦、稲ワラを給与し、制限給飼区の二頭に脂肪白色化促進の目的でビタミンE剤を添加給与しています。

(この肥育試験の成績は三月下旬にはできます。) 以上簡単に近況を概略報告しております。

(第二牧場長 広友元一)



2 飼料作物の作付面積とその実績

作物名	面積	10a当り収量	総収量	備考	
	a	t	t		
水田裏作 イタリアン	110	8	88	10月上旬播種	
畑	エンバク	10	5	5	10月上旬~11月下旬播種
	イタリアン	15	10	15	9月中旬播種
	デントコーン	80	6	48	4~8月3回播種
	ソルゴー	10	8	8	5月上旬播種
	カブ	70	5	35	9月上旬播種
甘 薯	10	4	4	6月上旬播種	
計	305		203		

# 私の酪農経営改善計画

第2期生 岡田 研 吾

わが家の農業経営は父が煙草作、米作と酪農をしていたのですが、私が昭和四三年酪農学校を卒業すると同時に酪農部門は全面的にまかされました。しかし飼料作物の点などから将来酪農一本で生計

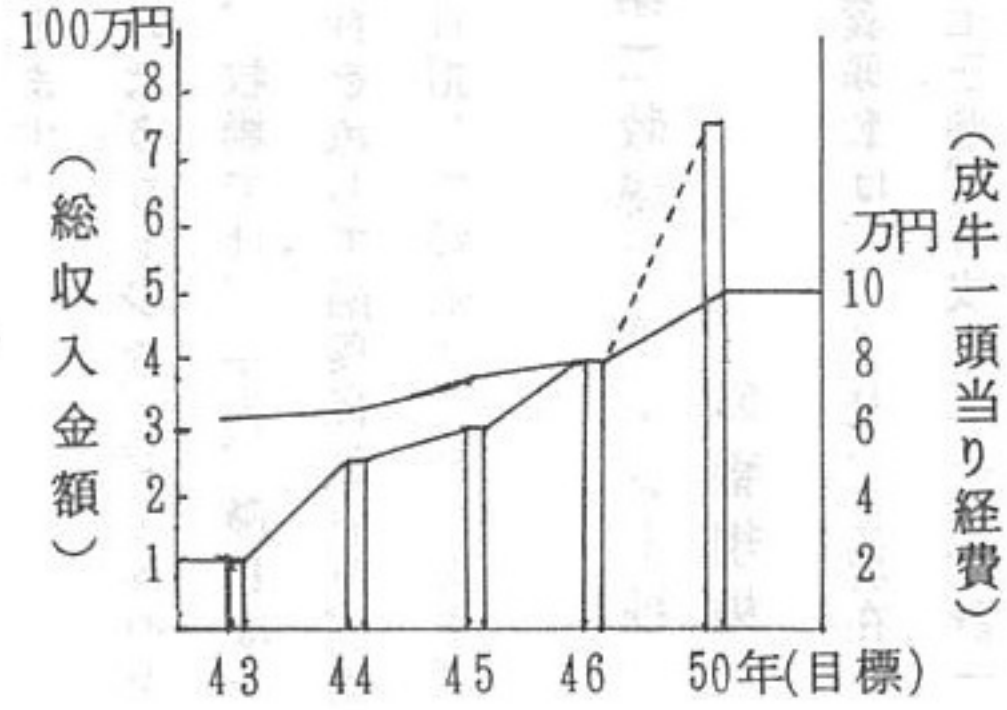
私の住んでいる西大寺太伯地区は県南の吉井川の下流に位置し、水田裏作のイタリアンライグラスを主体とした純水田酪農地帯です。太伯地区では六二戸の酪農家で約八〇〇頭を飼育し、牛乳日産六、〇〇〇kgで約三五万円を生産しています。酪農経営は父が煙草作、米作と酪農をしていたのですが、私が昭和四三年酪農学校を卒業すると同時に酪農部門は全面的にまかされました。しかし飼料作物の点などから将来酪農一本で生計をたてなければと思い、大型化、企業化の方向へもっていくことを計画しました。

多頭飼育による規模拡大と生産向上をはかるため、当時父がはじめていた青色申告の経営内容を参考に経営改善計画をたて資金をかり入れました。私の夢である酪農一本に持つていくため昨年まで作っていた煙草作を本年度からはやめましたので、本年度は飼料作物を増加することは目にみえているわけです。

私の目標はすべて昭和五〇年で完成の予定ですが、今後の発展の方向と問題点としては簿記帳と青色申告は将来とも継続し、企業的水田酪農を確立すべく機械化、省力化を基調とした新しい水田酪農型をめざしてすすみたいと思います。このため裏作利用にとどまっています。飼料作物に切り替え、サイロの研究をします。

将来は酪農部門で年間三〇頭搾乳し、収入額七五〇万円を目標に経営を拡大するつもりです。

4. 総収入および経費の実績と目標



5. 昭和42~50年までの経営経過と計画表

年次	成牛頭数	育成牛頭数	摘 要	投資金額 (万円)
42	8	4	平屋木造65㎡牛舎, 円型サイロ	—
43	7	3	4月父より以上の状態で受けつぐ	—
44	11	7	3月24頭入 牛舎完成	300
45	12	11	2月サイロ完成	25
46	14	11	乗用トラクター24PS購入	90
47	20	12	バキュームカー購入予定	30
48	25	10	運動場作成予定	20
49	26	8	平屋牛舎建設予定	50
50	30	8	ホーレージハーベスター購入, サイロ増築予定	80

1. 経営施設の概況

項目	数量	摘 要									
		本人	妻	長男	父	母	弟	祖父	祖母		
家族	5人 3人	24才 1.0	22才 0.8	8ヶ月 -	46才 1.0	44才 0.8	20才 -	74才 -	70才 -		
経営面積	水田 115 a 飼料畑 30 〃 普通畑 50 〃 山林 60 〃 小作 20 〃	裏作に飼料作物 S46年度までは煙草作の裏作に飼料作物 S47年度からは飼料畑とする 飼料畑									
乳牛	成牛 16頭 育成牛 11 〃	うち未經産牛 4頭									
施設	牛舎 300㎡ 育成牛舎 50 〃 運動場 200 〃 円型サイロ 1基 角型サイロ 4 〃 納屋 30㎡	鉄骨24頭入 直径1.6m 高さ2.5m 2.8m×2.4×2									
農具 (酪農関係のみ)	乗用トラクター 1台 ティラー 2 〃 モア 1 〃 カッター 1 〃 ミルカー 2基 軽四トラック 3台 その他	24PS 6PS 3PS ティラー6PSに取付け 草払機, 尿ポンプ, 乗用トラクター用フォークなど									

6. 昭和50年における飼料作物の作付計画

作物名	面積	総収量	備考
	a	t	
水田裏作イタリアン	110	8.96	サイレージの割合 60%
転作水田			
小作水田(裏作)イタリアン	340	272	
畑			
イタリアン	50	50	—
デントコーン	100	70	40%
ソルゴー	50	40	100%
カブ	50	25	—
採草地	50	15	—
計	650	561.6t	(サイレージ全量) 285t

3. 飼料作物の給与体系

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作物名	カブ											
	サイレージ											
	青刈イタリアン エンバク											
	デントコーン											
	ソルゴー											
	サイレージ											

# 非脱気処理によるビニール・スタック・サイレージ

第三牧場 金田 清

はしがき

わが国において、乾草とサイレージは越冬用粗飼料として最も重要な基礎飼料となっている。だが、現状では気象等の関係で、良質乾草を調製することが非常に困難となっており、経営上大きなデメリットとなつてゐる。従来畜産指導者の間に乾草生産に力点を置いた指導がなされてきたことは残念であるが、先に述べたように草の収穫時期が、ちょうど梅雨の多雨多湿な条件のシーズンにかかるため、乾草生産についてはよほどの画期的、経済的な調製法が究明されない限り、サイレージが今後ともますます重要な粗飼料となつてくることは明らかである。一方、酪農の急速な発展に伴つて、自給飼料としてのサイレージ生産量も昭和四十四年において、六五八万トンに達し、サイロも数多く設置されてきたが、なお基数が不足している。

フィルムによるビニール・パキウム・サイロが活用されている。これはそれぞれ色々な型式があるので、価格、経営条件にあわせて適当な製方法はいろいろもグランド・シートの上に埋蔵材料を堆積、整形し、これをカバーシートで被い、上下シートを重ね合わせ、クリップで密封し、排気ポンプで脱気するというのが順序である。脱気による利点は、①サイロ内が減圧されるので、周囲から大気圧が加えられ、埋蔵材料の密度が高くなる。②嫌氣的な状態になり、植物の呼吸作用が迅速に停止し、好気性雑菌の繁殖が防止される。③酸素が少なくなることによつて、周辺部のスポイレージが少なくなり、歩留りが高くなる。等が考えられる。

な品質のサイレージが得られれば、一層省力化でき、経済的にも大いに助かることになる。これらの点から昭和四十六年十月から昭和四十七年一月にかけて六トン入りビニール・スタック・サイロを使つて、サイレージの調製試験を行ない、次のような結果を得た。

スタック・サイロ調製試験 (調製方法)

サイロの設置場所は六十トン容量コンクリート製バンカー・サイロ内に設けた。床は平坦、排水良好で、設置場所の条件としては申し分ないところである。材料は二番刈りの混播牧草(オーチャード・グラスを主とするベレニアル・ライグラスとの混播)で、昭和四十六年十月十九日、六フット・レシプロ・モーターによつて刈り取り、二十四時間そのまま圃場に放置後、翌二十日サイド・レーキで集草し、バック・レーキで堆積後、二トン積みダンブ・トレーラーに積み込み、サイロの設置場所まで運搬し、詰め込んだ。最初、シリンダー型フォレージ・ハーベスター(MF七二七)をサイロのそばに設置し、ひろげたグラウンド・シートの上に細断したが、材料の水分が少なく、また下葉の枯れたものが多く細断能率が上らなかつたので、約一トン細断した後、無細切で、二トン積みダンブ・トレーラー三台分の材料を添加物は加えずブロック型に積み上げ、整

## スタック・サイロ調製試験

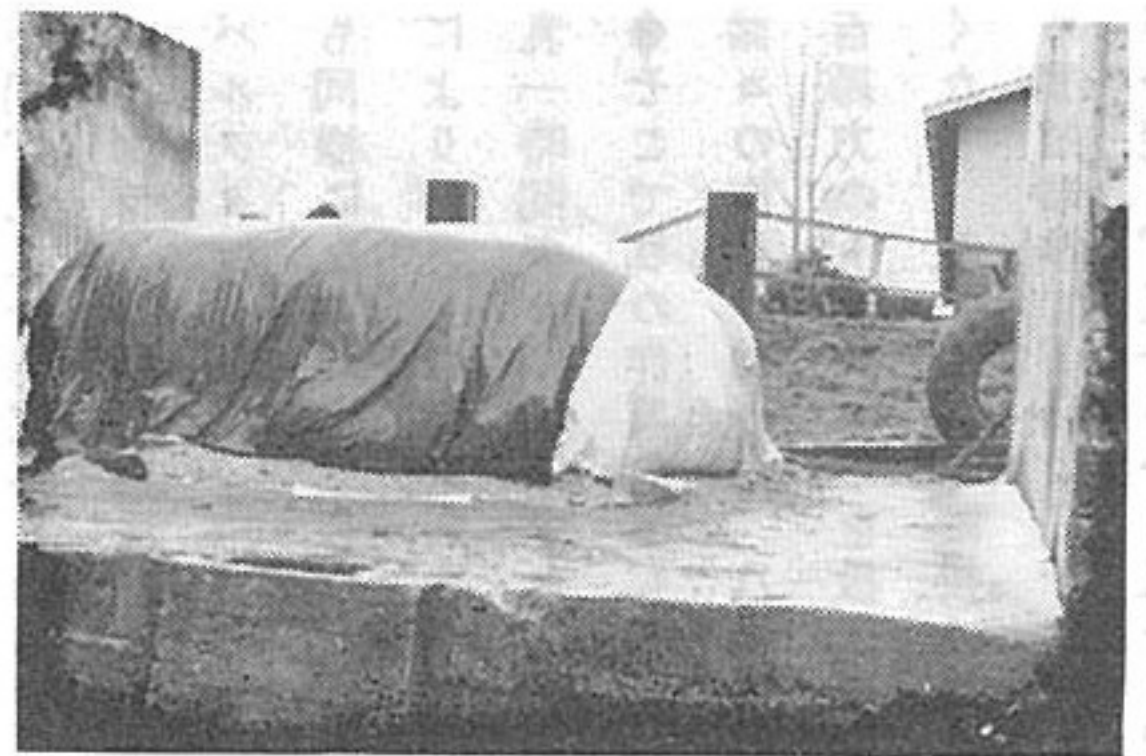
(調製方法)

形後カバー・シートで被い、グラウンド・シートと重ね、巻き込み、その上に砂で押さえ、密封した。でき上りの大きさは、底辺三二五×四四五cm、高さ一四〇cmであつた。詰め込み量は二トン積みダンブ・トレーラー一三台分、予乾により材料が軽くなつており、約五トン詰め込んだものと推定された。詰め込み日は昭和四十六年十月二十日、午後一時より午後四時まで、十人で詰め込んだ。詰め込み時の水分は、ケットの赤外線水分計で測定した結果五十六%で、かなりの低水分であつた。サイレージ詰め込み後の外観の変化の観察では、詰め込み翌日にガスでややふくらんだが、二日目しだいに萎縮、自重で沈下し、カバーがたるみ、三日目もやや沈下したが、四日目以後には変化がみとめられなくなりました。

### (サイレージの品質)

詰め込み日より八十五日目の昭和四十七年一月十三日に開封した。高さは一二〇cmとなつており、詰め込み時より二十cm低くなつていた。開封時の観察では、色は淡黄色、臭いはサイレージ特有の風味がし、サラッとして極めて良好なできあがりであつた。表面にごくわずかに白かびの発生している箇所があつたが、問題になるほどの量ではなく、廃棄部はなかつた。

次いで、このサイレージを泌乳中のジャーシー乳牛五十頭に一日約十kgあて給与したが、嗜好性はすこぶる良好で、残食は全然なく、一週間連続給与した結果、給与二日目に総乳量が十%も増加し、以後漸減した。以上の結果、被覆シートがある程度以上の気密性を保持すれば、六トン容量程度のものでも、埋蔵後、脱気してもしなくてもサイレージの品質には影響がないという結論を得たので、小規模酪農家、サイロ基数不足の酪農家、あるいは草地酪農家の余剰草、掃除刈を貯蔵する際に、簡単に、省力的に良好なサイレージを確保するのに有効な方法である。



スタックサイロ





いですが、ほんとうに見渡す限りの広大な平原であります。ポートランド市には日本人約七十名、ヒルスボロー町では約一人で僕だけです。

◆ここアメリカの西部酪農地帯でも連日の炎天下で、サイロ詰めや、干草の取り入れが一段と凄まじさを増し、本場の「酪農アメリカ」の姿そのままになって参りました。

また、ほとんどの農業雑誌にも「六・七月こそ酪農の月である」と大きく表紙に取り上げている位です。

◆私も、三月下旬に異国の空へと飛び立ってから、早四カ月目を迎えようとしています。

当初の頃は、新しい言葉からの生活と実習でしたので、色々と不自由な事も少なくなりましたが、今頃では、それらにあまり不自由さを感じなくなり、一日本人として、また「ヘンな外人」として、きびしい仕事の中にもようやく自分自身を持てる様になりました。

◆私のいるトーマス牧場は、サンフランシスコから北へ飛行機で三時間オレゴン州のポートランドに着き、そこから車で西へ一時間余りでヒルスボローという小さな町であります。しかし、町は小さ

◆私が、ここに着いて一番初めに受けた印象としては、日本で想像していた何倍か「広いアメリカ」

もちろん、国も耕地も機械化も乳牛もですが、それだけでなく、もう一つかれらヤンキーの「考え方」や「持っている心」までがその様に思えます。

しかし、我々の日本と比較出来ない経営規模の中にも、「一握りの草」を「一滴のミルク」を大切に

◆当、トーマス牧場には、搾乳牛二五〇頭、育成牛一〇〇頭、肥牛一〇〇頭で、耕地四〇〇エーカー

(二〇〇ヘクタール)であり、アメリカとしてはあまり大きな方

日常の管理作業がほとんど機械化されており、私も含めて五人で管理が出来る様になっています。

八頭複列式ミルクングバーラー、

スチールサイロ、それに直結してコンベアー式の飼槽、糞尿の処理

地還元として、牛舎の尿溜からカッターポンプで延長五キロメートルも続くパイプラインを伸ばし、

今、日本で問題となっている乳質改善においても、当牧場では、常に「清い牛乳」を生産する事を

◆この様な、我々から見るとほとんど完全に思える様な経営の中にも、ただ一つ労働者不足に頭を痛めています。この地域では日常の乳牛

管理には我々の様な実習生や、住み込みの労働者を入れるのですが、季節的な夏の農場作業には人手が

一部の牧場では、六月から九月まで夏休みの学生アルバイトや、町に居るヒッピーを使っています。

我々は、月給二六五ドル(約十万円)ですが、アメリカとしては少ない方です。学生アルバイトは一

時間約一ドル位です。

◆こうして、この牧場でアメリカ人と一諸に汗を流して働き、同じ物を食べて同じ生活をしていても、

仕事を早くスタートさせたいと思

一年間を一日一日大切に、貴重な勉強を体験とし、有意義に過ごしたいと思っています。

(一九七一・七・七) アメリカ オレゴン州) 四期生 井上喜寿

◆やっと寒さのピークも乗り切った頃でしょうか。私のアメリカでの実習生生活も屈指するところとなり、二月末日にはこの農家を離れ、帰国の途に付くこととなり

昨年から夏にかけての、午前三時半起床も過去の日々で、八月中旬の新搾乳舎の完成により、起床も朝五時となり、ミルクング・バーラーはヘリンボーン・タイプ六頭複列、内四頭複列使用、ここで

は酪大で使用しているクロータイ

トではなく八台のユニットで、搾乳時間はタンデムタイプで三〜四時間費やしていたものが、一人二時間、二人一時間半と短縮され、

パイプラインの自動洗浄に加え、バルクタンク(八、〇〇〇ポンド)も同様に

◆そこで私の作業内容も一変し、諸々の作業が加わり、八十馬力、百馬力のトラクターを扱う事も多くなり、晩秋から冬に掛けては羊の繁殖時季で、日に二十〜三十四

片方がこびれることが多く、簡易



# 大学校

## 日記



四十六年四月八日

第七期生の入学式挙行された。入学生は二十九名(うち、女子三名)で、将来の酪農経営の希望に胸をふくらませて入学した。

四月十六日

第一牧場の放牧が開始された。本年はいつもの年に比べ牧草の伸びが悪く、若干遅い放牧となった。なお、第二牧場の放牧は四月二十五日から実施された。

四月十九日

学校生産のホルスタイン種雄牛の肥育を開始する。従来、雄牛は生後直ちに売却していたが、試験的に本年は五頭肥育することになっている。

四月二十九日

蒜山地区のバレーボール大会に学生が出場し、惜しくも第四位となった。

五月二十六日

R・S・Kの「県政とくらし」のテレビ録画が実施された。学生の授業や実習、三木ヶ原の草地内での取材があり、始めてテレビカメラに写されるとあって、若い学生達は固くなっていた。

七月二十九・三十日

毎年実施している放牧牛の動態調査を第二牧場で行なった。昼は三十度を越す炎天下、夜はねむい目をこすり、二十四時間に渡る調査を交替で行なった。

八月十三・十四日

第六期生の集合研修を本校で開催した。自主研修中の成果発表と特別講演として「社会人としての心がまえ」について倉敷グラントホテル支配人野崎先生のユーモアとセンスあふれる講演があったほか、第七期生と交換ソフトボール大会を実施、熱戦の末若さをほこる七期生にがい歌が上った。

九月三十日

第七期生は前記の学習を終了し、先進地での酪農実務研修に自宅研修にと散っていった。研修先は、北海道八名、愛知県八名、岡山県七名、広島県四名、千葉県四名、

兵庫二名、岩手、茨城、神奈川、静岡、高知、大分、宮崎の各県に

一名づつ研修に行く予定で、自宅研修のみは四名となっている。

十月二十一日

高松宮殿下がご来校になり、本校内を校長の案内でご視察になった。学校職員、学生一同がお出迎えしたが、殿下から親しく学生に話しかけられ、将来の酪農経営の実施について励しの言葉があった。

十二月四〜七日

第六期生三十六名、南紀地方に修学旅行を三泊四日の日程で実施した。幸い好天に恵まれ、楽しい旅行を送り無事帰校した。

十二月二十四日

学生主催のクリスマス会が講堂で開催され、職員も招待を受け、楽しい一夜を過ごした。

四十七年一月二十五日〜二月四日

家畜人工授精講習会が十日間実施され、二月十六・十七日に修業試験が行なわれた。学生の大きな目標の一つであるので、夜遅くまで受験勉強のため学生寮に灯がともっていた。この努力の結果一同そろって試験に合格し、家畜人工授精師の卵が誕生した。



トラクター運転実習

易独房を設け管理する必要がある、これらに関する給餌、給水、そして去勢、断尾等で大変で、そして、寒い日には子羊の凍死の危険もあります。

夏の四十度を越した暑さも夢の出来事の様で、この零下二十度を下る寒さは、分娩直後の子牛の凍死を引き起こしましたが、搾乳牛に関しては、防寒設備としてのトタンで屋根と三方を囲った簡素な小屋で、此の中に麦藁をコンクリートがかるうじて見えない程度に敷くだけであり、且、二十〜三十度は此の内に入らず、外の風の通り抜ける所に伏して、寒さに耐えているのです。

各牛鼻に氷を垂らしながら健康で、乳量の低下は見られなかった様でした。

◆そして現在、クリスマス、正月も過ぎ、残り少ない日々を如何に有意義に過ごし、また、帰国後の将来計画を練っている訳ですが、将来の酪農、農業に対する幾つかの疑問を解決すべく渡米した私ですが、それは、山となり海となり私に帰って来ている様です。

(一九七二・二・一四)

アメリカ カンサス州)

五期生 岡 部 幹 雄



第6期生の集合研修

### お知らせ

第三期生遠藤裕史君（岡山県真庭郡湯原町）が、東京で開催された第三回全国山村青年会議において、岡山県代表として「ジャージー酪農の実情について」体験発表した。

### ★編集後記

△今年の冬は、八十才の古老も知らないほどの暖冬異変で、暖いまま春に入るかと思っていたところ、二月の終りから降りだした雪が積り、ようやく蒜山の冬らしい雪景色となりました。この雪で一番喜んでいるのは学生達で、本格的にスキーが滑べれるとあって、夕方薄暗くなるまで熱心に練習していました。

△本校卒業生も次第に数を増し、在職生を含め県立時代から数えると、三〇〇人を越す多数となっております。卒業生を一同に会しての同窓会の開催は、地域が中国四国と広いうえ、酪農経営を実施している多忙な皆様を集めることは難しいので、各地域、各県で同窓会を実施してもらって、それに学校の先生方に出席していただいたらと思っております。ご連絡をお待ちしています。

